

ウルリム  
響

# 星 環

特定非営利活動法人

聖公会生野センター機関誌

第78号

2023年12月4日発行

題字：康秀峰

URL <http://www.nskk.org/province/ikuno>

E-mail: [nskkikuno@gmail.com](mailto:nskkikuno@gmail.com)

聖公会生野センター 検索



## 大阪コリアタウン歴史資料館へ行ってみた！

ミリアム 増山 悦子

10月6日(木)に川口基督教会の「聖書の会」メンバーを中心に、今年4月にオープンしたコリアタウン歴史資料館の見学に行きました。「聖書の会」とは毎週木曜日午前10時半から教会で行っている聖書の勉強会のことで、柳司祭の発案で決行されました。歴史資料館の入場料は大人一人300円なのですが10人以上の団体になると200円になり、私達は丁度10人集まったので割引対象となりました。

中に入ってみると思いの外狭い空間で「え？これだけ？」と正直思ったのですが、よく見るとモニター画面が4つもあり、読みたい内容を選んでかなりボリュームのある資料や写真を見ることができました。

コリアタウンはかつて猪飼野(いかいの)という地名の真ん中にあり、この名前は港を示す「猪甘の津」に由来しており、百済などから人々が渡来し居を構えました。当時の大阪は「東洋のマンチェスター」と呼ばれるほどの工業都市へと変わりつつあり、日本の植民地下で困難な生活を強いられた人々が朝鮮半島や済州島から渡って来たということです。そんなコリアタウ

ンも韓流ブームなどの勢いもあり、今年年間200万人が訪れる観光地となっています。

資料館の左に小道があり、そこを抜けていくと緑に囲まれたカフェ風の空間がありました。また館内の奥は美味しそうなコーヒーやスイーツが頂けるカフェとなっており、2階も落ち着いた雰囲気テーブル席が並ぶオシャレな空間となっています。

資料館を出るとほぼ目の前にある韓国料理のお店へ揃って移動し、ビビンパ・スンドゥブ・チヂミなど熱々の美味しい料理に舌鼓をうちました。そのお店を出て少し行くとコリアタウンの通りに出て、ここは日本か？と見紛うばかりのハングル文字で溢れるお店が並ぶ賑やかなストリートで、食べながら歩く韓国スイーツなどに目を奪われつつしばし珍しい食材のキムチなどの買い物を楽しみました。

コリアタウンの歴史に触れ、教会の仲間と共に過ごせた楽しい時間でした。

(ますやま・えつこ 川口基督教会信徒)

## 写真でみる、聖公会生野センターと生野の歴史



写真は左から、聖公会生野センター外観、のりばん、1960年代の朝鮮市場

## 生野フィールドワークから想う

司祭 ペテロ 金山 将司



ウルリムに投稿させていただくのは今回初めてのことで、こうして寄稿させていただくことに感謝いたします。

先日、大阪教区在日朝鮮人・韓国人宣教協働委員会、社会宣教委員会が主催で、実に4年ぶりに生野フィールドワークを開催いたしました。鶴橋駅からコリアタウンへのお決まりのコースをたどる中でも、商店街の様子や、街並みの変化、特に、朝鮮学校や御幸森小学校が閉校し、以前と違う雰囲気を感じつつ、今回は新たにできた大阪コリアタウン歴史資料館を訪ねました。資料館ではパネルと共に貴重な生活の記録、生野、猪飼野という地域で働き、生き延びてきた人々の歴史を、オモニハッキョの文集に書かれたオモニたちの肉筆や写真を通じて感じました。

日本に住み、受けた教育を受け、日々の糧を経て、生きる。これは当たり前のことだと思います。しかし今の時代ですらなぜか「在日」というレッテルを張られると、途端、それが当たり前でなくなってしまふ。日本で暮らし、共に支えている仲間であるにも関わらず、生まれで差別されるのは大変おかしな点だと感じます。かつての時代はたしかに職を求めて日本の文字も知らず、場合によっては密航で日本に渡って来た人々もおられたでしょう。オモニハッキョの文集に密航で捕まり・・・という文書がありましたから壮絶な思いで日本に渡り、当時出稼



ぎに来られたのではないかと思います。しかし、日本の経済発展の要であった、ゴム加工業、金属加工業をはじめとした製造業として日本の成長を支えた柱の一つは彼ら在日朝鮮人・韓国人のたちであったと思うのです。資料館にあった子供の文集に、金属工場での家族の暮らしを書いたものがありました。朝は父親が入れたモーターの音で目を覚まし、工場の父に出かけの挨拶をし、帰れば働く工場の父に帰宅を告げる、遅くまで働く家族の情景が書かれていました。そのように日本を勤勉に支えてきた人々を差別し、国に帰れということは、日本国は共に苦労を分かち合う人を、都合よく使い捨てにする、ということを発信するものであり、それは恥ずべきことだと思います。人を使い捨てにする、それを許容する社会は、必ず、その適用範囲を弱い人から順番に広げてゆき、多くの人々を不幸にします。

私は、この使い捨てが広がる世の中であって、ぜひ、共に生きる、差別ではなく手を取り合うことを大切にしたいと願います。差別とは少数で弱いものをコミュニティから排除し、自分たちの満足と安心を得る行為だともいますが、その末路は、差別してきたものが、その大小はあれども次の差別対象になるという連鎖です。

許容できない社会は、不幸をもたらす続けます。刷り込まれた意識、清算されない痛みや悲しみ、自分と違う事の苛立ち。その差別へつながる鎖を断ち切るのは、生まれの違い肌の違い、言葉の違い、様々な違いを互いに受け入れることだと思います。そして受け入れるということは相手を知ることです。知らないものを受け入れる人はいないし、真実を知らぬまま受け入れれば、禍根が残る。私はぜひ、相互に知る、そして受け入れる、このプロセスを大事にして、共生するとは何かということを思い巡らせて参りたいと思います。

(かなやま・まさし 恵我之荘聖マタイ教会牧師、  
プール学院中高チャプレン)



## 2023年日本聖公会宣教協議会を通して

司祭 アンデレ松山健作

山梨県清里の清泉寮で日本聖公会宣教協議会「いのち、尊厳限りないもの～となりびととなるために～」が開催された。各教区教会、諸委員会から代表者132名が集まり宣教現場における実りが持ち寄せられ、2012年からのあゆみが振り返られ、各現場に聴く中でさまざまな協議と意見交換がなされた。しかしながら、今回の宣教協議会は、1995年清里、2012年浜松と比較し、一言で表現するならば「教会回帰」という側面が色濃くあらわれる協議会という印象であった。

私たちは、この数年間コロナ禍における非対面での活動を経験し、さまざまな発見や気づきを与えられた。その一方で教会共同体は、減少、減退を経験する数年であった。現在堅信受領者数は、11,000名程まで落ち込んでいる。そのような意味では私たち教会は、さまざまな消失と傷、コロナ禍における疲弊を感じつつも、もう一度宣教に取り組もうという原点としての教会回帰が主目的になったことは当然の道筋であったのかもしれない。

ただし清里は、1995年宣教協議会において「日本聖公会の戦争責任に関する宣言」が作成された日本聖公会の歴史的転換点となった地でもある。そのような意味でも過去の歴史を振り返り宣言のさらなる推進については、協議する必要があったと感じている。

さらには2023年は関東大震災における朝鮮人大虐殺が起こってから100年が経過した年である。パレスチナとイスラエルの紛争にも見られるような強者からのジェノサイドが、日本の地で起こってから100年である。浜松で宣教協議会が行われた後、韓国朝鮮人に対するヘイトクライムは続き、ナショナリズムが高揚し、街頭やネット空間において排外主義が拡大し、魂の殺人である差別行為が毎日のように行われている。尊いいのち、となりびとのいのちは、脅かされ、尊重されない日本社会の現状がある。

しかし今宣教協議会において、歴史における加害者としての責任については協議される時間はなく、また今日におけるウクライナとロシアの戦争やパレスチナとイスラエルにおけるジェノサイドについても全体として協議されることはなかった。

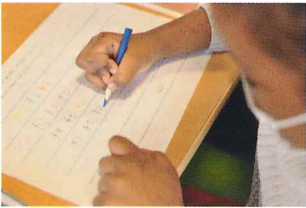
2012年宣教協議会は「いのち、尊厳限りないもの～宣教する共同体のありようをもとめて」というテーマによって東日本大震災による東京電力福島第一原発事故をめぐる社会問題が中心となりつつも、アジアに対する植民地責任や戦争責任については提言においても確認できる。もちろん、そのような視点は首座主教の武藤謙一師の挨拶文に「偏見や差別による人権侵害は一向にありません」という今日の状態に対する指摘がなされており、わたしたちが何を大切に、どこに向かうのかに対する問いかけがなされている。

2023年宣教協議会は「清里からの呼びかけ」(仮)の完成を見ずまま、また協議する時間が不足したまま解散するという運びになった。過去の罪責から今日的課題について協議されなかったという意味が何を意味するかについては、私たちが検討しなければならないだろう。100年前の朝鮮人大虐殺に関して、かつての聖公会各種機関誌においては関心が持たれなかった状況に類似しているのかもしれない。しかし、無実の人々が短期間のうちに数千名と大量殺戮が行われたにかかわらず、関心も持たれなかったという事実は、となりびとに対する視点の欠如であり差別であり、私たちの歴史認識において何が問題であるかを検討しなければならない。

とはいうものの今宣教協議会において、全く歴史における加害についての視点が欠落していたわけではない。閉会礼拝代祷には、以下のような祈りがささげられたことを最後に紹介しておきたい。

近代の日本が、植民地支配やアジア太平洋戦争を通じて、甚大な被害を与えた、アジア近隣諸国の方々への悔い改めを深め、わたしたちが1996年5月に第49(定期)総会にて決議された「聖公会の戦争責任に関する宣言」の内容と精神をますます実行していくことができまうように。「となりびと」である各国の諸教会とともに、和解や平和のための働きを担っていくことが出来まうように。

(まつやま・けんさく 金沢聖ヨハネ教会牧師)



## メタノアの活動の紹介と 聖公会生野センターに期待するもの

サムエル 山田 拓路

### 1. メタノアの活動紹介

私たちNPO法人メタノアは、多様なルーツをもつ子どもへの教育を主な事業としている団体です。中国から来日してITエンジニアとして働く親の元に暮らす子どもや、ネパール料理店で働く親の子どもなど、関わる子どもたちの家庭背景は様々です。昨年度からはクルド難民（トルコ出身の少数民族）やウクライナ難民の方々に出会うことも増えました。その子どもや家族の日本語学習を支援したり生活相談に乗ったりすることも、新たな活動の柱となっています。



れる社会の礎になると信じるからです。この願いは、「聖公会生野センター ミッション・ステイトメント 2022」に深く通じるものがあると感じています。

### 2. 聖公会生野センターに期待するもの

聖公会生野センター（以下、「センター」）は、その働きを始めて30年あまり、一貫して在日コリアンの方々と深くつながり、歩みを共にし続けてこられました。そして、その姿から私は長年学びを得てきました。そのような私から僭越ながらセンターに期待したいことは、具体的な活動も然ることながら、その背景にある理念や思想を広く世の中に伝えていただきたい、ということです。

言うまでもなく、差別のない社会の実現は、一世代だけ、あるいは限られた地域だけで努力して成し遂げられる目標ではありません。世代や地域を超えて理想の社会像を分かち合い、その実現に向けて多くの人々が連帯して力を尽くしていくほかないのだと思います。

センターに連なる皆さまには、「ミッション・ステイトメント」の背景にある理念や思想を広く社会に、ことに私たちを含むこれから数十年の運動を担う次世代に深く分かち合っていただければ幸いです。（やまだ・たくじ NPO法人メタノア代表理事）



メタノアという組織名の由来は、聖書に登場する“視座を移す”という意味の古代ギリシア語です。私たちは、すべての、文字どおり「すべて」の人が幸せを追求できる社会を築くという目標を掲げています。その実現のため、この社会で最も小さくされた人びとの願いにこそ耳を傾け、その望みが共感できる場所へ視座を移したい、と考えています。誰も小さくされない社会は、すべての人が幸せにな



## 日韓聖公会青年セミナーをとおして、 神様の導きを教えられて

司祭 ジョイ 千松 清美

日韓聖公会青年セミナーは、1995年に日韓協働委員会主催で開催された日韓青年交流キャンプが始まりです。キャンプでは両国の青年が共に会うことを中心にしていましたが、共に同じ方向を向いて歩み出すことを中心にし、平和について共に考えるセミナーへと移行しました。このセミナーは2006年8月河口湖で始まり、毎年8月15日前後の日程で開催地を日韓の交互で行い、2019年までに11回実施しました（2020年からは青年委員会から再び日韓協働委員会へ主催を移しています）。日程に8月15日を入れるのは、この日が日本にとっては終戦記念日、韓国にとっては解放記念日となるため、両国の平和を求める大切な日として受けとめているからです。セミナーのプログラム最終日には、青年たちによる平和を求める礼拝が行われます。毎回様々な工夫がなされますが、青年たちは開催地での歴史的な戦争・災害・事件を実際に訪問し、見聞きした経験を、自分たちの感じたままの言葉や歌などで平和への祈りにかけて神様にささげます。それはとても率直で、正直で、それぞれ全く違う表現をします。け

れど神様へ祈りをささげる青年たちの姿は、互いの信頼感と結びつきを確かにする姿であり、セミナーをとおして導かれた神様の愛を確認する姿であると思います。

聖公会生野センターの働きは地元の方に寄り添い、その一人一人に必要な様々なことにできる限り応えていこうとされていると思います。そのなかで地域性による歴史的出来事を学ぶことはもとより、そこに住む方々の現在の課題や希望を見聞きし、現実的な問題を共に学び合うことも大切な働きだと思っています。青年たちはそのような現実的な出来事にも大変敏感で、心を寄せて、自分たちの課題の一つとして考える力があります。もし日韓聖公会青年セミナーで一つの開催場所として聖公会生野センターがあげられるとすれば、青年たちは共に感じ、共に学び、共に思いを伝えあうことにより、その場で得た経験をもとに、彼らの実生活での新たな一歩、次に進む歩みを始めていけるのだろうと思います。（せんまつ・きよみ 石橋聖トマス教会牧師、管区青年委員会委員長）

### 聖公会生野センター ミッション・ステイトメント 2022

- ① わたしたちは、小さくされた人々、弱くさせられている人々の声を聴きます。
- ② わたしたちは、イエス・キリストの愛に倣い、共に生きる新しい社会を目指します。
- ③ わたしたちは、差別、抑圧、戦争を無くすために働きます。
- ④ わたしたちは、多民族、多文化にある人々とつながって生きていきます。
- ⑤ わたしたちは、痛みを背負わされてきた人々と共に歩むイエス・キリストの十字架を共に背負います。

# クリスマス献金のお願い

主のみ名を賛美します。

当センターは住民の4人に一人が在日韓国・朝鮮人である大阪生野地域を中心として、日韓教会の交流、すべての人が大切される社会の実現をめざし在日高齢者や障がい者の居場所、文化事業などを行っています。

昨年30周年に新事業を始め、今年には在日高齢者のデイサービスの開始しました。

しかし通常の会計は非常に厳しい状況であります。聖公会生野センターの活動を支えるために今一度よろしく願いいたします。

生野地域にあって行政や地域諸団体と共に「人に優しい街づくり」に加わり、聖公会では大阪教区在日韓国朝鮮人宣教協働委員会、管区日韓協働委員会の働きを担っています。

これからも地域の中でのネットワークを大切にしながら聖公会生野センターの働きが多くの人に支えられていることを感謝してやみません。

今後とも皆様のお祈りとご支援をお願いいたします。

2023年 降臨節

## 送金方法

【ゆうちょ銀行（郵便振替）】

口座番号 00910-1-321780

口座名 特定非営利活動法人聖公会生野センター

※郵貯銀行以外からご送金の場合

〇九九（ゼロキュウキュウ）店（099） 当座 0321780

口座名 特定非営利活動法人聖公会生野センター

\*自由献金（ご寄付）は随時受け付けております\*

昨年より、クレジットカードで会費納入・献金ができるようになりました（ホームページからお手続きください）



## NPO法人聖公会生野センター理事会

主教 磯晴久（理事長・大阪教区）司祭 原田光雄（副理事長・大阪教区司祭）／司祭 岩城聰（大阪教区引退司祭）／加納佳世子（大阪聖アンデレ教会信徒）／張聖子（聖ガブリエル教会信徒）／早川育子（こひつじ乳児保育園園長）／司祭 奥晋一郎（和歌山聖救主教会）／鈴木憲二（大阪教区後援会副会長）／司祭 ウイルソン ウォーレン（芦屋聖マルコ教会牧師）／司祭 小林聡（教区在日韓国朝鮮人宣教協働委員会）／司祭 古澤秀利（聖ガブリエル教会管理牧師）／丹田則史（聖ガブリエル教会信徒）／司祭 柳時京（川口基督教会牧師）／司祭 卓志雄（管区宣教主事）／吳光現（聖公会生野センター総主事）／長野泰信（監事 石橋聖トマス教会）／熊取谷志郎（監事 岸和田復活教会）

▼正会員：一口 10,000円（何口でも結構です）

※法人の事業の決定に参加できます

▼後援会員A：一口 3,000円（何口でも結構です）

▼後援会員B：一口 5,000円（何口でも結構です）

▼維持会員：A 30,000円／B 50,000円／C 100,000円

※新規に会員になれる方はお名前、ご住所、所属等をご記入の上、郵便・FAX・E-mailでご連絡ください。

・email：nsskikuno@gmail.com

・FAX：06-6224-7869

・郵送：〒544-0002 大阪市生野区小路3-11-19

発行所：聖公会生野センター

〒544-0002

大阪市生野区小路3丁目11番19号

発行人：磯 晴久

編集人：吳 光現

TEL 06-6754-4356

FAX 06-6224-7856

E-Mail nsskikuno@gmail.com

http://www.nssk.org/province/ikuno